
最近の米国の幼稚園

その二



津 守 真

社会変化

サンフランシスコの空港の税関を出ると、すぐに航空会社の空港係スチュワーデスが近づいてきて、「この次の飛行機はどれにお乗りになりますか。その便は二階の何番の窓口は何時までにおいでください」と流暢な日本語で話しかけてくる。太平洋を隔てて、東京と向かい合っている米国の西玄関のことだけあると驚いた。空港事務所の扉には「立入禁止」などと漢字で標識が書いてある。それにしても、二十年前に二週間以上かかって船で海を渡り、港の埠頭に降り立ったときは大きな違いである。そのときはシアトルだったことにもよるのかもしれないが、ただ横文字だけの中に突然投げ出されて、異国に来た隔絶感をひしひしと感じたものであった。科学技術の進歩によって、往復時間が著しく短縮された。日曜日の夕方出発して、日曜日の朝サンフランシスコに到着する。正味八時間の旅である。何日も海の波だけを見て過ごした後に、はじめて燈台の光を船の甲板から見た感激、港の灯が本当の寶石のようだと、思っただけ目を離すことができなかった。二十年前にはだれもがそれを体験しながら海を渡ったのである。いまはその日

のうちに空をひととびして地球の向う側に着いてしまうと
いう安直さがある。二十世紀の現代では、人間の壁は、海
や山の隔てる壁よりも厚いのである。

街を歩いてみて、また社会の変化を考えさせられること
にいくつも出会った。ソニーのネオンサインを大きく掲げ
た電気商品の店、マミヤやミノルタのカメラがずらりと並
ぶ写真機の店など。後に、米国の奥地の市、ミネアポリス
を訪れたときも、写真機屋の店員たちが、揃いのミノルタ
の商標入りの赤いジャケットを着ていたし、友人たちの家の
トランジスタラジオ、テープレコーダーは大がいソニー
の製品であったことを思い合わせると、米国人の庶民生活
の中への日本の経済進出は目ざましいものがあることを知
った。敗戦直後に、米国製品は何もかも珍しく、生活面で
も戦勝国と戦敗国という差がはっきりしていた時代に比べ
ると、日本の社会的位置の変化は驚くべきである。ことに
物質面の生活に敏感な米国人は、製品の優秀さを評価でき
るとともに、日本が社会的にのし上がってくる脅威を強く
感じるであろう。

もう一つ私が驚いた社会変化は、都会の生活が物騒にな
ったことである。

私が、夕方街をひとりで歩いたことを友人に話したとき、
彼は男でもひとり歩きは危ないと注意してくれた。女は暗く
なったらひとりで歩かないということは常識だそうである。
そう思ってみると、街をひとりで歩いている人は少ない。も

とも米国の道は自動車で走るようにできているから、歩
行者はほとんどいないのであるが、店の集まっている周辺
でも、ぶらぶら歩く人というのはほとんどいない。強盗や
殺人が簡単に行なわれるのだという。友人の話によると、
自動車が停止信号で止まっているとき、外からドアをあけ
てはいつてきて物をとられたり殺されたりすることがある
そうである。かつては、自動車のドアを走行中にロックす
るのは、内側から人が落ちることがないようにするためで
あったが、いまは、外から人がはいつてこないようにする
ためになつてしまったらしい。泥棒が多いことはたしかの
ようである。米国人の友人とレストランにいったとき、写真機
を自動車の座席に置いたまま出ようとしたら、わざわざ座
席の下にいられてくれた。人から見えるところに置くのは、
他人を誘惑することになるからと彼は言った。大学の研究
室に泥棒がはいつて、テープレコーダーその他の電気製品
を一晚でごっそり盗まれたというような話を教授の美しい

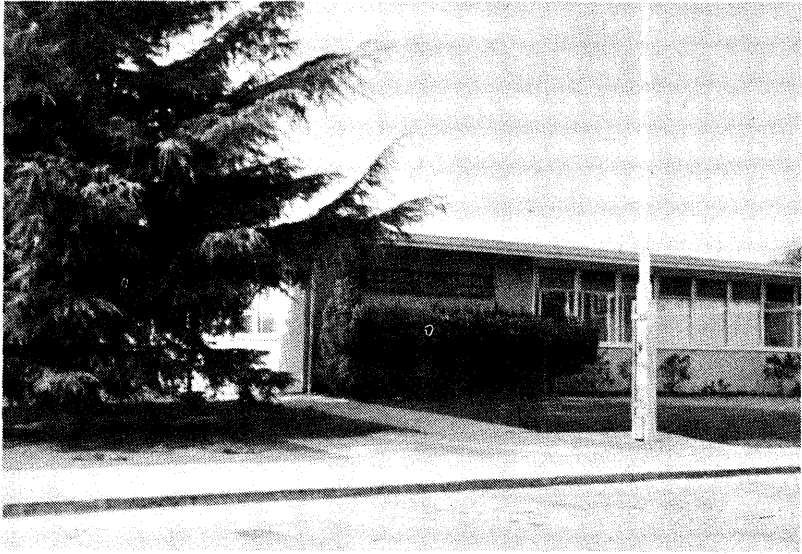
セクレタリーが語ってくれた。後にミネアポリスに行ったときにも、私が泊った友人の家の隣家で、朝起きてみたら、居間のカラーテレビとテープレコーダーが盗まれていたという話をきかされた。かつては、湖の都といわれていたこの市では、湖で水泳するのに、写真機も洋服も岸辺においたまま何時間でも泳いでいて平気だったのだ。物を盗まれるというところは考えもしないところであった。どうしてそんなことになってしまったのか。私は親しい友人に何人もたずねてみた。皆が異口同音にこたえたことは、麻葉とベトナムであった。麻葉が蔓延している。麻葉にとりつかれたら、莫大なお金がいる。普通の給料とは単位の違う額の金を得るには、盗むより他ない。麻葉はベトナムと切り離せない。戦場のおそろしさから逃避するために、若い兵士は麻葉を使う。彼らが故国に無事に帰ってくる時には、麻葉と一緒に連れて帰る。「だがそれを責めることができようか。わたしだって実戦の恐怖にさらされれば、麻葉を使わないと断言できないのに」と、あたりまえの市民である私の友人は語った。精神面でも物質面でも、ベトナム戦争による米国の荒廃は、かくすことのできないものがある。

さらに後に東部のペンシルヴァニアに、ハリス教授を訪ねたとき、私の米国の印象としてこのはなしをすると、先生は社会統計を示して、世界の大都市の中で最も安全な都市は東京であると言われた。女性が夜道をひとり歩いて安全な唯一の都市であろうと言われた。ふだん日本に住んでいると、このようなありがたさに気付かない。世界のどこにいても同じ気易さで道を歩けると思っている。しかし、ところによっては、それは生命の危険にさらされながらのことなのである。これは、何百年もの古い歴史をもった町と、荒野の中に、ひとかたまりの住む場所をつくってきた新興の町との違いかもしれない。町の中はどんなに近代的なビルディングが建つていようと、町からはずれたら依然として荒野である。人が住んでいるごくわずかの周囲は安全でも、その点と点をつなぐ道では、もはや安全は保証されない。日本では、南の端から北の端まで屋根を伝って歩いていくことができるが、外国人が評したことばは有名であるが、文字通り正しい所も多い。しかし、もっと精神的に、日本人はみな同じ屋根の下に住んでいると言つてよいのであろう。

文化的環境に恵まれない人々

さて、荒野の中に他から切り離されて住む人々は、文化的に取り残された人となる。米国の町は、多かれ少なかれそのような性質をもっているといえよう。だから、積極的に他の都市の人々と交流を求め、インフォォメーションを求めようとする。また、自分自身もインフォォメーションの与え手となろうとする。それを積極的に求めようとする人々、つまり向上心のない人々は、たとえ都市の真中に住んでいても、文化的に取り残された人となってしまふ。これが米国の下層階層である。自分たちから求めることもせず、地域的にも、社会的にも、他から切り離された彼らには、読み書きのチャンスも、書物にふれる機会もない。新しくこの土地に來た人が多いから顔なじみもなく、古い伝統による知恵もない。日本で貧民階層といわれた人々の間には、人情があり、土地に根ざした文化があった。教育も教養もないといわれる母親の中に、暖かく、すぐれた母子関係を見ることができた。米国の下層階層にあつては、親子の断絶、親の拒否の態度など、日本でいうのとは水準の異なつたものである。

米国の下層階層は、都市の中では、鉄道線路のわきとか、大きなビルの間とか、ある地域にかたまっている。最近二十年間に、スラムクリヤランスといつて、このような地域に立派なアパートメントハウスを建てて、公費で彼らをよりよい住宅に移そうという政策がとられてきて、生活条件はかなり向上した。私が訪れたミネアポリス市では、二十年前にスラム街だつたセブンコーナーという地域は、スラム住宅は一掃されて、近代的なアパートが建つていた。また、生活保護世帯のための老人ホームが建つていた。その中のある人々は、このような機会に、もっと文化的な生活との交流を求めて、中流階層の中にとけこんでいたであろうと推察する。しかし、ある人々は、建物は立派になつても、精神的スラム性を脱することができないのだという。収入も少なく、親子関係は断絶し、知的刺激も少ない。米国の下層階層のもう一つは、都市の周辺の、地域的にも都市から隔絶された土地に住む人々である。彼らは子どもが学校にゆくのも不便なほど、まばらに存在している。自動車でハイウェイを走るとき、注意深く見ていると、そのような家をあちこちに見ることができる。家のまわりが整頓されていないのですぐわかる。



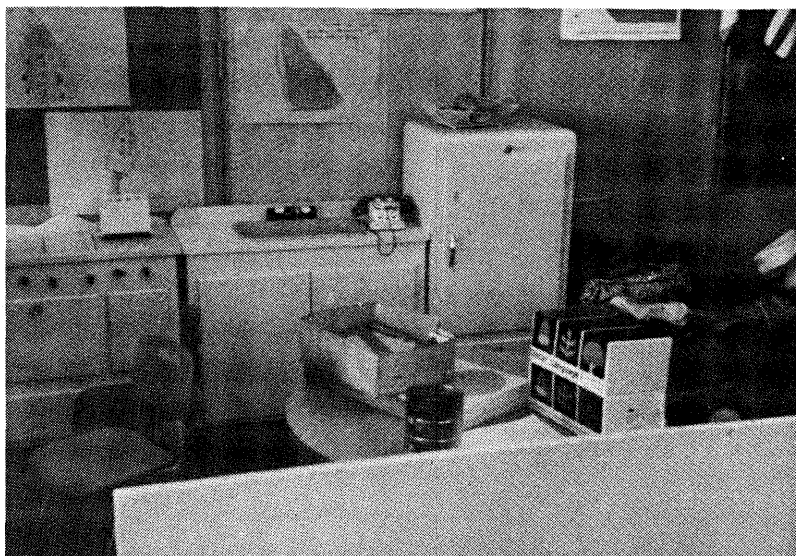
セドグウィックスクール

この十数年の間に、米国で急速に普及したヘッドスタートプログラムは、このような文化的環境に恵まれない下層階層の子どもたち (Culturally deprived Children) に、文化の機会を与えるために、連邦政府が予算を出してつくったプログラムであった。

セドグウィックスクール

サンフランシスコの郊外にあるセドグウィックスクールを訪れたとき、小柄なからだにひげをはやした校長先生は、この学校は文化的に恵まれない地域の子どもたちの学校であると説明してくれた。この幼稚園では、ベライター・エンゲルマン方式の幼児教育を行なっているが、この種の子どもたちにはきわめて有効な方法とっていると校長先生は付け加えた。

ベライターとエンゲルマンは、多くの文化的に恵まれない子どもたちは、小学校に入学した段階で、言語や思考の能力が中流階層の子どもよりも一年以上遅れていると考える。彼らの親は、日常使用することばについてみても、語彙も少なく構文も単純である。米国のように、ヨーロッパや世界各国からの移民によって成り立っている社会では、



ままごとコーナー

英語を話せない人も多く、その子どもたちは、その親の母国語も英語もともに十分に話せないものも多い。それに加えて母国の文化基盤から切り離され、米国の文化からも取り残されて、子どもが家庭においてうける文化的刺激も少ない。このことは米国人の常識として察せられていることである。ベライターとエンゲルマンは、このようなことからくるおくれをとりもどすために、小学校入学前に知的促進のプログラムを作らねばならないと考える。

そのプログラムには、たとえば次のようなことがある。

1 おとなが質問をしたときに、肯定と否定と両方のことばを用いてこたえる。先生「これは何ですか」子ども

「これはボールです。これは本ではありません」

2 反対語を用いる能力、大きいー小さい、上ー下、長いー短い、厚いー薄い。

「もしそれが大きくなければ、それは小さい」

3 物の配置を記述する前置詞を正しく使うこと。上、中、下、間など。

「鉛筆はどこにありますか」「鉛筆は本の上にあります」など。

ここに掲げたのは一例であるが、このような言語刺激は、



グループ指導

文化的に恵まれない子どもたちに欠けており、そのことに集中して一問一答式の訓練を行なうことが有効であると彼らは考える。

この学校の幼稚園で行なわれている教育は、このペライター・エンゲルマン方式を採用しているということであった。

幼稚園の教室は、かなり広いへやが戸だななどで三つの空間に仕切られ、その一つの空間では、ひとりの先生をかこんで八人の五歳児が輪になって腰かけている。もう一つの空間は他の八人の五歳児が、ひとりの先生を半円状に囲んで腰かけている。もう一つの空間はままごとコーナーのしつらえがしてあるが、グループ別の指導をうけているときには、ここには子どもはいない。

いずれのグループも、先生と一問一答の形式で進められる。また、八人の子どもがワークブックを与えられて、それに合わせて線を描いたり、字を書いたりしているときもある。この時間は四〇分くらい続くが、各グループとも、先生を中心にして進められる。グループは、子どもたちの理解力の程度によって分けられている。

私どもがいったときには、程度の低い方のグループでは、

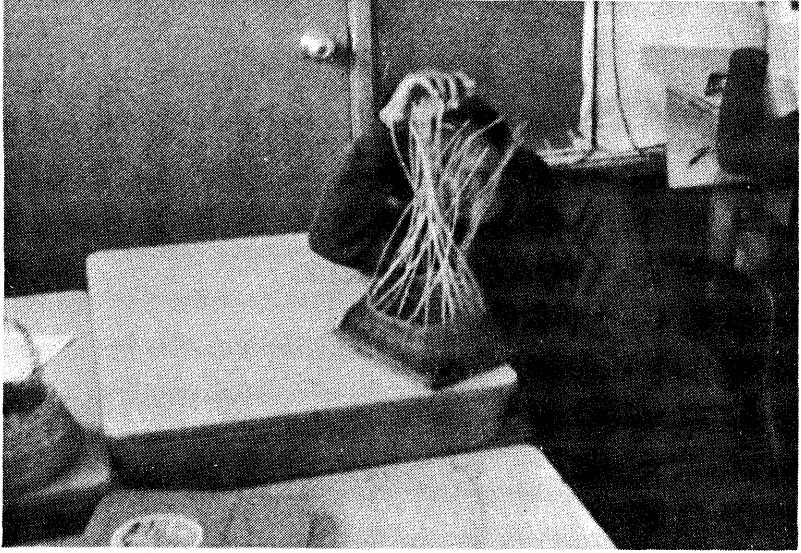
具体的な物がより多く用いられているように見受けられた。先生と子どもは、一問一答であるが、どの子どもたちも、先生の話すことに興味をもって耳を傾け、また他の子どもと先生との対話を注意して見守っていた。八人という少数のグループであることにもよるのであろう。また、先生が大へんに一しよけんめいに、その対話に打ちこんでいることにもよるのであろう。あるときは、子どもを抱きかかえるようにして、小さな声で話し、あるときは、傍によびよせて、その子の言うことに耳を傾ける。長時間ではあるけれども、先生と子どもたちとの間には、暖かい空気が流れ、子どもたちが熱心に参加していることは印象的であった。

参観のあと、先生の説明によると、この幼稚園への入園希望者の中でこのプログラムに適しない子どもたちのためには、別のプログラムが設けられているが、この日には来ていないとのことであった。ここで考えさせられることは、知的教育と言っても、ひとりひとりの子どもに合わせてプログラムが組まれており、一律な集団指導ではないことであった。前回にも記したように、米国の教育には、ひとりひとりの子どもを尊重する伝統が根をおろしていることを

ここでも強く感じさせられた。

同じ建物の中に、幼稚園のみでなく、小学校の教室もある。私共は小学校六年生の教室を案内された。それは、この学校の幼稚園の方式とは対照的で、進歩主義教育の実践そのものともいえるもので興味深かった。三〇人くらいの生徒を二人の先生が担任しており、教室も二つあった。子どもたちはどちらのへやにも行くことができる。

私共が訪ねた一つの教室では、生徒はそれぞれ別の机で別の方向を向き、いろいろな活動をしていた。ある子どもは竹でかごを編み、ある子どもは算数の計算をしている。ある子どもは図書室から借りてきた参考書を山積みにして、社会科学の研究をしている。またある子どもは木彫をやり、ある子どもは絵の具を使っていた。私はひとりの子どもに、いま何の時間なのかとたずねてみた。すると、その子どもは、コントラクトカードというガリ版刷りの紙をみせてくれた。それには算数、国語、社会などと教科が書いてあり、一週間のはじめに、子どもは自分でそれぞれの教科で勉強することをきめて、先生と相談して訂正する。それを家に持ち帰り、両親にサインしてもらうようになっていた。子どもはそれをどの順序でどの時間にやるかは任されている。



自由な活動（一）



同上（二）



自由な活動 (三)



フォークを歌う

だから、めいめいが好きなように勉強しているのである。ひとりひとりの子どもが楽しそうであり、張り切つてめいめいの活動に従事していることは、一目みて明瞭であつた。どの子どもも、自分のしていることに誇りをもつていて、參觀者に何をしているのかを説明してくれた。この教室の先生は男で、図工を得意とする先生であつた。もう一つの教室を受け持つ先生は女の先生であり、音楽が得意とのことであつた。間もなく、參觀者の私共にクリスマススのフォークソングを歌ってくれるとのことで、全員もう一つの教室に集まつて歌ってくれた。そこでも、それぞれ好きなどころに腰をかけ、先生はへやの中央でピアノを立ち弾きする。みんな心から楽しげに、次々と耳なれないクリスマスフォークを歌ってくれた。その快いリズムに送られて私どもは外に出たのであつた。

帰りがけに、私は校長先生に、六年生のクラスではどうして二人の先生が協力して一つのクラスを担当するようになったのかとたずねた。すると、校長先生の答えによると、たまたま一人の先生は図工が得意で、一人は音楽が得意で、その先生たちから二人で協力して一つのクラスを運営したいとの申し出があつたので、校長先生はそれを許したの

であるとのことであつた。それでは幼稚園ではどうしてベライター・エンゲルマン方式の教育をとりいれるようになったのかをたずねたところ、それは教育委員会から、こういう新しい方式があるが希望する先生があるかとたずねてきたのであるとのことであつた。そして、この学校の幼稚園の先生がそれに応募して講習をうけたのであるとの由であつた。

あたり一面ひろびろとした土地、文化的に恵まれない子どもたちのために新しい学校を建てる。ひとりひとりの子どもにも合うような教育プログラム、ひとりひとりの教師の創意が重んじられる。みんなが考えて、いいとなればどんなことでもやつてのける。アメリカの教育の地盤には、そういう大らかさがある。

ベライター・エンゲルマン方式の教育についていえば、それは進歩主義教育を生み出した米国の教育や社会の地盤の上に立つて理解されねばならないと私は思った。